

## 鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』における 「涅槃」と「滅度」(2)

前 川 健 一

はじめに

本稿では、(1)に引き続き、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』における「涅槃」の用例について検討を行う。(1)では、「涅槃」が梵本における *nirvāṇa* と直接対応する例を挙げたが、(2)ではそれ以外の用例について列挙し、考察を行う(章番号は(1)からの継続)。

### 2.2 「涅槃」と *nirvṛti* との対応

「涅槃」と対応する梵語としては、*nirvāṇa* 以外では、*nirvṛti* が多い。この2つは語源的にも異なるものであるが、鳩摩羅什は同義として扱っていることになる。

- ・ 1 若人遭苦 厭老病死 爲説涅槃 盡諸苦際 (序品、T9. 2c23-3a1)  
(正法華) 一切衆生 所造苦患 以無巧便 治老病死  
猶斯等類 説寂滅度 比丘當知 貧劇惱困 (T9. 64a29-b2)  
*duḥkhena saṃpiḍita ye ca sattvā jātijarākhinnamanā ajānakāḥ /*  
*teṣāṃ prakāśenti praśānta**nirvṛtim* *duḥkhasya anto ayu bhikṣaveti*  
// (1.9, KN10)
- ・ 2 告諸聲聞衆 及求緣覺乘 我令脫苦縛 速得涅槃者 (方便品、T9. 6a24-25)

(正法華) 佛今日告 諸聲聞衆 緣覺之乘 如所立處

捨置已逝 入泥曰者 所可開化 各各得度 (T9. 68c2-4)

āmantrayāmi imi sarvaśrāvakān pratyekabodhāya ca ye 'bhiprasthi-  
tāḥ /

saṃsthāpitā ye mama nirvṛtīya saṃmokṣitā duḥkhaparamparātaḥ //

(2.20, KN33)

- ・ 3 破法不信故 墜於三惡道 我寧不說法 疾入於涅槃 (方便品、T9. 9c15-16)

(正法華) 諸闇冥者 便當謗毀 適毀此已 趣非法地

吾初未曾 說奇妙法 常樂餘事 當何興立 (T9. 72b12-14)

te mahya dharmam kṣīpi bāla bhāṣitaṃ kṣīpitva gaccheyur apāy-  
abhūmim /

śreyo mama naiva kadāci bhāṣitum adyaiva me nirvṛtir astu śāntā

// (2.117, KN55)

この場合、対応する『正法華』では「涅槃」に相当する語が見いだせない。  
あるいは「常楽」が相当するののかも知れないが、確定はできない。

- ・ 4 我本著邪見 爲諸梵志師 世尊知我心 拔邪說涅槃 (譬喻品、T9. 11a10-11)

(正法華) 觀若干種 諸所祠祀 歷外異學 諸邪僞術

由是之故 解佛言教 觀見脫門 即說滅度 (T9. 73c18-21)

drṣṭīvilagno hyahamāsi pūrvam parivrājakas tīrthikasammataś ca /

tato mamā āśayu jñātva nātho drṣṭīvimokṣāya bravīti nirvṛtim //

(3.11, KN62)

- ・ 5 得涅槃樂 (譬喻品、T9. 13c4)

(正法華) 使滅度安 (T9. 76b01)

*nirvṛtisukhaprāptāḥ* / (KN81)

- ・ 6 充潤一切 枯槁衆生 皆令離苦 得安隱樂  
世間之樂 及涅槃樂 (藥草喻品、T9. 20a5-7)  
(正法華) 吾當飽滿 一切群萌 愚駭之黨 身形枯燥  
除諸苦患 得立大安 燒盡愛欲 獲至滅度 (T9. 84a25-27)  
saṃtarpayisyāmy ahu sarvasattvān saṃśuṣkagātrāṃs tribhave vilā-  
gnān /  
duḥkhena śuṣyanta sukhe sthapeyaṃ kāmāṃś ca dāsyāmy ahu *nir-  
vṛtim* ca // (5.18, KN128)
  
- ・ 7 開涅槃道。(化城喻品、T9. 23b18)  
(正法華) 使獲滅度。(T9. 90a21)  
deśayatu bhagavān *nirvṛtim* (KN166)
  
- ・ 8 故以方便力 爲息說涅槃 言汝等苦滅 所作皆已辦 (化城喻品、T9. 27a26-  
27)  
(正法華) 故佛念斯 如是利誼 厭於佛道 不得滅度  
一切道父 而覺了之 賢等事辦 今得羅漢 (T9. 94b3-6)  
tato mayā cintitu eṣa artho viśrāmabhūtā imi *nirvṛtikṛtāḥ* /  
sarvasya duḥkhasya nirodha eṣa arhantabhūmau kṛtakṛtya yūyam  
// (7.104, KN197)
  
- ・ 9 諸佛之導師 爲息說涅槃 既知是息已 引入於佛慧 (化城喻品、T9.  
27b7-8)  
(正法華) 諸大導師 說法如是 且令休息 自謂滅度  
適得休息 言獲無爲 緣是之故 暢諸通慧 (T9. 94b17-19)  
etādṛśī deśana nāyakānāṃ viśrāmahetoḥ pravadanti *nirvṛtim* /

viśrānta jñātvā na ca nirvṛtīye sarvajñajñāne upanenti sarvān //  
(7.109, KN198)

梵本では、この偈には nirvṛti が2度出るが、後者 (nirvṛtīye) は『妙法華』では訳されていない。『正法華』では「無為」が相当する。

- ・ 10 今於世尊前 自悔諸過咎 於無量佛寶 得少涅槃分 (五百弟子受記品、T9.29a28-29)

(正法華) 猶如愚冥 不能分別 所以一一 而獲滅度  
今日歡然 安住所化 志願廣普 諸通慧事 (T9. 97b26-29)

deśemahe atyayu tubhyam antike yathaiva bālā avidū ajānakāḥ /  
yaṃ vai vyaṃ nirvṛtimātrakeṇa parituṣṭa āsīt sugatasya śāsane //  
(8.35, KN212)

## 2. 3 「涅槃」と parinirvāṇa との対

parinirvāṇa は一般に「般涅槃」と音写されるが、『妙法華』では「涅槃」に対応する例が見られる。しかも、後に (2.7) 見るように、『妙法華』では「般涅槃」は特殊な仕方 で用いられており、名詞 parinirvāṇa が「般涅槃」と音写されることはない。

- ・ 1 又舍利弗。是諸比丘比丘尼。自謂已得阿羅漢是最後身究竟涅槃。便不復志求阿耨多羅三藐三菩提。當知此輩皆是增上慢人。(方便品、T9. 7b29-c3)

(正法華) 若比丘比丘尼。已得羅漢自已達足。而不肯受無上正眞道教。定爲誹謗於佛乘矣。雖有是意佛平等訓。然後至于般泥洹時。諸甚慢者乃知之耳。(T9. 69c24-27)

api tu khalu punaḥ śāriputra yaḥ kaścid bhikṣurvā bhikṣuṇī vārhatvaṃ pratijānīyād anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau prañidhānam

aparigr̥hyocchinno 'smi buddhayānāditi vaded etāvan me samuc-  
chrayasya paścimakaṃ parinirvāṇaṃ vaded ābhimānikaṃ taṃ  
śāriputra prajānīyāḥ / (KN43)

- ・ 2 諸比丘。若如來自知涅槃時到。(化城喻品、T9. 25c20)

(正法華) 如來正覺滅度之時。(T9. 92b18-19)

yasmin bhikṣavaḥ samaye tathāgataḥ parinirvāṇakālasamayam  
ātmanaḥ samanupaśyati (KN186)

- ・ 3 其入於涅槃。(如來壽量品、T9. 42b29)

(正法華) 以諸伴黨若干之數而現滅度。(T9. 113b29-30)

teṣāṃ ca tathāgatānām arhatāṃ samyaksambuddhānām parinir-  
vāṇāya (KN317)

- ・ 4 亦復現言當入涅槃。(如來壽量品、T9. 42c04)

(正法華) 亦不滅度而說泥洹。(T9. 113c4-5)

tasmimś tasmimś cātmanaḥ parinirvāṇaṃ vyāharati (KN317)

一般に parinirvāṇa (般涅槃) は「完全な涅槃」と解され、肉身を残さない無餘涅槃を意味するとされるが、『妙法華』では nirvāṇa と parinirvāṇa を区別せずに「涅槃」と訳していることが分かる。

## 2. 4 「涅槃」と pari-nir-√vā および nir-√vā との対応

上記のように、『妙法華』では、nirvāṇa と parinirvāṇa および nirvṛti を区別せず「涅槃」と訳しているが、それに対応して、それぞれの対応動詞である nir-√vā と pari-nir-√vā および nir-√vṛ の活用形・分詞についても、「涅槃」と訳している場合がある。後(次稿)で考察するように、このような場合「滅度」「滅」などを用いる場合が多いので、なぜ「涅槃」を用いるのかは別途考察

を要する。初めに nir-√vā と pari-nir-√vā に対応する例を検討する。

- ・ 1 生滅度想。當入涅槃。(化城喻品、T9. 25c16)  
(正法華) 一切志在無爲之想。謂當滅度。(T9. 92b14-15)  
*parinirvāṇasaṃjñīnaḥ parinirvāsyanti* / (KN186)

この文では、初めに *parinirvāṇa* があるが、こちらは「滅度」と訳されている(『正法華』では「無為」)。

- ・ 2 如來不久當入涅槃。佛欲以此妙法華經付囑有在。(見宝塔品、T9. 33c14-15)  
(正法華) 今如來身幸欲滅度。比丘當捨如來所供養供事之誼。奉順恭敬於此經典。(T9. 104a22-23)  
*parinirvāyitukāmo bhikṣavas tathāgata imaṃ saddharmapuṇḍarīkaṃ dharmaparyāyam upanikṣīpya* // (KN250)

- ・ 3 說無漏妙法 度無量衆生 後當入涅槃 如烟盡燈滅(安樂行品、T9. 39c14-15)  
(正法華) 分別講說 無漏之法 教化無數 億姪衆生  
夢中所見 如斯色像 滅度因緣 悉無生死 (T9. 110b10-12)  
*prakāśayitvā tahi dharma nāsravaṃ nirvāpayitvā bahuprāṇikoṭyaḥ / nirvāyati hetukṣaye va dīpaḥ supino ayaṃ so bhavatevarūpaḥ* // (13.72, KN295)

この偈では、下線の *nirvāyati* の前に *nirvāpayitvā* があるが、こちらは「度無量衆生」の中の「度」として訳されている(『正法華』では「教化」)。

以上の3例では、いずれも「入涅槃」という動詞句として nir-√vā ないし pari-nir-√vā を訳していると思われる。

## 2.5 「涅槃」と nir-√vr との対応

- ・1 未涅槃者令得涅槃。(藥草喻品、T9. 19b12-13)

(正法華) 未滅度者令得滅度。(T9. 83b20-21)

aparinirvṛtaḥ parinirvāpayāmi / (KN123)

ここでは、2度「涅槃」が出現するが、最初の「涅槃」は「未涅槃」という表現から動詞として使用されていると考えられる。

- ・2 皆名爲寶相 國土及弟子 正法與像法 悉等無有異

咸以諸神通 度十方衆生 名聞普周遍 漸入於涅槃(授学無学人記品、  
T9. 30b20-23)

(正法華) 皆當成覺 號同一等 名曰寶英 流聞世界

其佛國土 平等殊特 諸聲聞衆 等亦如是

神足光明 皆遍世間 周流一切 十方國土

分別經法 有所依倚 正法存立 等無有異 (T9. 99a11-16)

ekaṃ ca teṣāmiti nāma bheṣyati ratnasya ketūtiha loki viśrutāḥ /

samāni kṣetrāṇi varāṇi teṣāṃ samo gaṇaḥ śrāvakabodhisattvāḥ //

ṛddhiprabhūtā iha sarvi loke samantatas te daśasu ddiśāsu /

dharmaṃ prakāsetva yadāpi nirvṛtāḥ saddharmu teṣāṃ samam eva

sthāsyati // (9.15-16, KN222)

この箇所は、『妙法華』と『正法華』・梵本との対応関係に齟齬があるため、2偈をまとめて掲出した。『妙法華』の「涅槃」に対応する『正法華』の句は、位置の上からは「有所依倚」であるが、意味の上では対応しない。

これらの場合も、最初の「未涅槃」が動詞としての「涅槃」であり、その他は「得於涅槃」「入於涅槃」という動詞句として nir-√vr を訳していると思われる。

## 2. 6 「涅槃」と動詞句との対応

「涅槃」が単独の語ではなく、一連の動詞句に対応している例がある。

- ・ 1 如來於今日中夜當入無餘涅槃。(序品、T9. 4b1-2)  
(正法華) 如來夜半至無餘界當般泥洹。(T9. 66b10)  
adya bhikṣavo 'syāmeva rātryāṃ madhyame yāme tathāgato  
'nupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau parinirvāsyatī // (KN21)
  
- ・ 2 佛授記已。便於中夜入無餘涅槃。(序品、T9. 4b5-6)  
(正法華) 佛授決已。尋於夜半而取滅度。(T9. 66b13)  
atha khalvajita sa bhagavāṃś candrasūryapradīpas tathāgato  
'rhan samyaksaṃbuddhas tasyāṃ eva rātryāṃ madhyame yāme  
'nupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau parinirvṛtaḥ / (KN21)
  
- ・ 3 於夜後分入於涅槃。(藥王菩薩本事品、T9. 53c16-17)  
(正法華) 其佛夜半便取滅度。(T9. 125c26)  
tasyāmeva rātryāṃ paścime yāme 'nupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau pa-  
rinirvṛto 'bhūt // (KN411)

梵文を見ると、すべて「無餘涅槃界 (anupadhiṣeṣa nirvāṇadhātu) に般涅槃する」と直訳しうる箇所であり、1の『正法華』の「至無餘界當般泥洹」はそれに直接的に対応している。

## 2. 7 「般涅槃」の場合

先にも触れたように、「般涅槃」は一般に parinirvāṇa の音写であるが、『妙法華』では、以下の例に見るように、すべて動詞 (般涅槃する) として使われて扱われており、名詞 parinirvāṇa に対応するものは1つもない。

- ・ 1 復見諸佛般涅槃者。復見諸佛般涅槃後以佛舍利起七寶塔。(序品、T9. 2b23-24)  
(正法華) 諸佛世界滅度衆聖。所建寶廟自然爲現。(T9. 63c14-15)  
ye ca teṣu buddhakṣetreṣu parinirvṛtānām buddhānām bhagavatām  
dhātustūpā ratnamayās te 'pi sarve saṃdrśyante sma // (KN7)
- ・ 2 諸佛於此而般涅槃。(如來神力品、T9. 52a27)  
(正法華) 十方諸佛在中滅度。(T9. 124b26)  
tasmimś ca pṛthivīpradeśe sarvatathāgatāḥ parinirvṛtā iti vedī-  
tavyam // (KN391)
- ・ 3 汝可安施床座。我於今夜當般涅槃。(藥王菩薩本事品、T9. 53c9-10)  
(正法華) 爲佛施座今取滅度。(T9. 125c23-24)  
tad gaccha tvam kulaputra mama mañcaṃ prajñāpayasva parinir-  
vāyīṣyāmīti // (KN410)

## 2. 8 対応梵文のないもの

最後に、『妙法華』の中の「涅槃」の用例で、梵本には対応箇所がないものを検討する。

- ・ 1 是故舍利弗 我爲設方便 說諸盡苦道 示之以涅槃  
我雖說涅槃 是亦非眞滅 (方便品、T9. 8b22-24)  
(正法華) 佛了善權 卓然難及 爲說勤苦 斷其根原  
衆生之類 諸見所惱 佛故導示 便至泥洹 (T9. 70c21-23)  
teṣām ahaṃ śārisutā upāyaṃ vadāmi duḥkhasya karotha antam /  
duḥkhena saṃpīḍita dr̥ṣṭva sattvān nirvāṇa tatrāpy upadarśayāmi  
// (2.67, KN48)

これは2.1の6として挙げたものであり、「示之以涅槃」の「涅槃」は梵本の nirvāṇa と対応しているが、「我雖說涅槃 是亦非眞滅」は梵本に対応文がない。『正法華』の方にも対応文がないので、鳩摩羅什が漢訳にあたって付加したものと考えられる。

・2 以此供養像 漸見無量佛 自成無上道 廣度無數衆

入無餘涅槃 如薪盡火滅 (方便品, T9. 9a21-23)

(正法華) 禮拜大聖 嗟歎稽首 所行如是 身無垢染

當漸漸觀 無數億佛 於諸導師 多造利誼 (T9. 71c10-12)

なお、この箇所『正法華』の文は、高麗藏と宋元明三本・宮内庁本とで配列が異なる (T9. 71c15注31) が、梵本との対応から、宋元明三本・宮内庁本の方の配列を採用した。この偈に対しては、梵本に対応箇所がない。しかし、『正法華』と『妙法華』はおおむね対応しているのので、訳者が付加したのではなく、現行梵本から脱落したのではないかと思われる。

・3 是人雖生滅度之想入於涅槃。(化城喻品, T9. 25c17)

この文は、梵本にも『正法華』にも対応文がない。この文を含む前後を対照すると、以下のようになり、『妙法華』による補いであることが分かる。

汝等諸比丘及我滅度後未來世中聲聞弟子是也。我滅度後。復有弟子不聞是經。不知不覺菩薩所行。自於所得功德生滅度想。當入涅槃。我於餘國作佛。更有異名。是人雖生滅度之想入於涅槃。而於彼土求佛智慧。(T9. 25c13-18)

(正法華) 當來末世。或有發意。學弟子乘。成爲聲聞。後不肯聽受菩薩之教。不解佛慧不行菩薩。一切志在無爲之想。謂當滅度。甫當往至他佛世界。順殊異行生異佛國。當求道慧 (T0263\_09.0092b12-16)

ye ca mama parinirvṛtasyānāgate 'dhvani śrāvakā bhaviṣyanti

bodhisattvacaryāṃ ca śroṣyanti na cāvabhotsyante bodhisattvā  
vayam iti / kiṃ cāpi te bhikṣavaḥ sarve parinirvāṇasaṃjñīnaḥ  
parinirvāsyanti / api tu khalu punar bhikṣavo yad aham anyāsu  
lokadhātuṣv anyonyair nāmadheyair viharāmi tatra te punar utpat-  
syante tathāgatajñānaṃ paryeṣamāṇās (KN186)

これは、「生滅度想。當入涅槃(涅槃の思いを起こして、(未来に)涅槃に入るはずである)と言っているにもかかわらず、次に「而於彼土求佛智慧(その国土(他の国土)で仏の智慧を求めると言っていて、一見したところ、文意の上で齟齬があるので、その落差を埋めるため、「是人雖生滅度之想入於涅槃(この人は、涅槃の思いを起こして、涅槃に入るけれども)」という補いを付したものである。

・4 既知到涅槃 皆得阿羅漢 爾乃集大衆 爲說眞實法(化城喻品、T9. 27a28-29)

(正法華) 故勸助立 住斯德報 偶察諸賢 得至羅漢

汝等一切 皆棄衆苦 一切衆會 乃演斯法(T9. 94b6-8)

samaye yadā tu sthita atra sthāne paśyāmi yūyām arhata tatra  
sarvān /

tadā ca sarvān iha saṃnipātya bhūtārtham ākhyāmi yathaiṣa dhar-  
maḥ // (7.105, KN198)

この文では、『妙法華』の「涅槃」に直接対応する語は『正法華』・梵本にはないが、内容的には『正法華』の「斯徳報」、梵本の atra sthāne (その境地で)に相当する。この直前の偈で以下のようにあって、「斯徳報」、atra sthāne はそれぞれ nirvṛti の言い換えであり、『妙法華』はそれを「涅槃」として明示したものと解される。

故以方便力 爲息說涅槃 言汝等苦滅 所作皆已辦 (T0262\_09.0027a26-27)

(正法華) 故佛念斯 如是利誼 厭於佛道 不得滅度

一切道父 而覺了之 賢等事辦 今得羅漢

(T0263\_09.0094b3-6)

tato mayā cintintu eṣa artho viśrāmabhūtā imi nirvṛtikṛtāḥ /  
sarvasya duḥkhasya nirodha eṣa arhantabhūmau kṛtakṛtya yūyam  
// (7.104, KN197)

## 2. 9 小結

以上、『妙法華』の中の「涅槃」について検討してきた。対応梵語から言うと、nirvāṇa だけでなく、parinirvāṇa や nirvṛti をも包含しており、さらに、それぞれの対応動詞の活用形・分詞も含んでいる。ただし、動詞の活用形・分詞に対応する場合は、「入涅槃」のような動詞表現が用いられており、基本的には「涅槃」は名詞として用いられていると言える。一方、「般涅槃」の方は、逆に、名詞 parinirvāṇa に対応するものはなく、全て動詞（般涅槃する）として用いられている。

次稿では、「涅槃」と意味的に近い「滅度」の検討を行い、両者の差異や使い分けの原理について考察したい。

参考文献等は、最終回でまとめて掲出する。